

## 編集部員

- ◎畠田 敏行\*（茨城大学 全学教育機構）  
 ○大野 賢一\*（鳥取大学 学長室）  
 浅野 茂\*（山形大学 学術研究院）  
 末次 剛健志\*（有明工業高等専門学校 総務課）  
 佐藤 仁\*（福岡大学 人文学部 [教学 IR 室兼務]）  
 藤原 将人\*（立命館アジア太平洋大学 アカデミック・オフィス）  
 ◎ 編集長 ○ 副編集長 \*大学評価コンソーシアム幹事

## 編集後記

我が国において IR は導入できたのか、という問いがある。概ね導入できつつあるような気もするし、そうではないような気もする。しかしながら、期待されたような一期待自体が歪んでいることも多い気がしなくはないが一活躍をしているのだろうか、と問うた場合、どの程度の賛同が得られるのだろうか。

IR は、もちろん、それ自体が改善の主体者ではない。学内のさまざまな意思決定や判断、それにつながる検討の際の情報提供を行う機能である。そうになると、学内のクライアントが「ああ、IR がいてくれて助かった」もしくはそれすら思わないくらいに定着しているような状況が展開しているのだろうか。果たして、どの程度の大学でそのような状態になっているのだろうか。少なくとも、IR 関係のセミナーに来られる方の所属機関では、あまりそのような状況には達していないと思われる。もっとも機能していないからセミナーに出席されるという面もあるので、バイアスが十分にかかった私見となるわけだが。

IR については、課題把握、収集、分析（可視化）、活用という4つの業務の相があり、収集や分析はある程度、知見が積み上がりつつある。それらのノウハウを扱ったセミナーなども数多く開催されている。しかしながら、活用という本丸を攻め落とさない限り、IR が定着した、と云えるような状況にはならないだろう。そうになると、我々として何ができるのか。やはり大学評価コンソーシアムとしては、場を提供し、全国の担当者の知見を収集、整理、共有するという基本に立ち返った活動が求められているのでは、と思うことが多い。対面でどこまでできるのか、ということ、なかなか情勢との相談になるが、当面、この「活用」にフォーカスを置いた活動を考えて行かなければ IR は次のステップに進めないのでは、と考えている。(湖)

## 発行日・発行者・著作権について

発行日：令和3年10月7日（第12号）

発行者：大学評価コンソーシアム 編集者：大学評価コンソーシアム情報誌暫定編集部

※ 著作権は、大学評価コンソーシアムに帰属します。ただし著者がこれらの全部ないし一部を著者自身で他に利用する（講演や教材で用いる等）場合、その記事の出所を明示すれば足りるものとします。著者以外の方は、一般的な引用ルールに従ってご利用ください。